

# 出 会 以 (22)

—— キリスト教講演会・講話集 ——

2011年度



**桃山学院大学**

キリスト教センター

桃山学院の「キリスト教精神」

## 「自由と愛の精神」

桃山学院の学院章には、`SEQUIMINI ME、(我に従え)という言葉が刻まれています。それはイエスの弟子アンデレがイエスに従ったように、「自由と愛の精神」をもっていきることです。使徒パウロが書いています。「あなた方は、自由を得るために召しだされたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。」(ガラテヤの信徒の手紙 5 章 13 節)

自由には他者への愛と責任がともないます。「自由」とはひとりの人格と主体性を尊重すること、「愛」とは互いに仕えあいながら他者と共に生きることです。この「自由と愛の精神」は、単にキリスト教の立場だけでなく、すべての人間が一致しうる普遍的な理念であり、人類共通の目標です。

人間のそのような可能性を開花させながら、高い理想をめざしてチャレンジし続けていくこと、それこそが桃山学院の一世紀を超える伝統が目指そうとする「キリスト教精神」であり、「世界の市民」への道なのです。

# 目 次

## 第 1 回キリスト教講演会（2011 年 6 月 3 日 金曜日）

講演テーマ：「在日を生きる。聖書に生かされる」  
—韓国併合 100 年を見据えて—

講 師：  
沖縄キリスト教学院大学教授 金 永秀 …………… 1

## 第 2 回キリスト教講演会（2011 年 11 月 11 日 金曜日）

講演テーマ：  
「人はいかに生きるべきか～驚く・頑張る・交わる」

講 師：東北大学・仙台白百合女子大学名誉教授  
（文化功労者）岩田 靖夫 …………… 27

# 「在日を生きる。聖書に生かされる」 —韓国併合 100 年を見据えて—

沖縄キリスト教学院大学教員 <sup>キム</sup>金 <sup>ヨンス</sup>永 秀

## はじめに

皆さんこんにちは。沖縄の大学でキリスト教や韓国の文化、歴史を教えております、キムヨンスと申します。私は、在日コリアン二世として兵庫県の西宮市で生まれて育ちました。本日は在日について、又、韓国併合百年の歴史について、又、聖書について自分史との関係の中でお話ししたいと思います。焦点をどこにあわせればいいのか自分でも迷っておりますが、最後までお付き合いください。

## 在日の成り立ちについて

昨年二〇一〇年は、日本が韓国、朝鮮を正式に植民地として支配してからちょうど百年になりますが、先ず、何故在日コリアン（朝鮮人・韓国人）が現在日本にこれほどいるのかについてお話をしたいと思います。スライドの表を見ますと年代ごとの在日の人口が示されています。一九一〇年に日本にいた朝鮮人の数は七九〇人程度だったのです。

朝鮮人の日本移住の理由の始まりは「土地調査事業」によります。日露戦争が終わって大韓帝国を保護国にした日本は一九〇五年から土地調査を始めます。これが一九一八年まで続くのですが、これによっ

て、多くの朝鮮の人々の土地が奪われます。先祖代々の持っている土地でも登記しなければ取り上げられます。四六%ぐらいの農民が土地を取り上げられる。取り上げた土地は日本人に安く払い下げられて、日本人地主の持つ土地のほうが朝鮮人よりも多くなります。土地が奪われることによって生活できなくなった人々が日本にやってくるということになります。

第二の理由は産米増殖さんまいぞうしょく計画によります。一九二〇年代に始まり一九三四年まで続きます。簡単に言うとこれは、朝鮮の米の値段を安く買い叩き、日本に持っていくというものです。これによって日本の食糧事情はよくなるのですが、朝鮮の農家は豊作でも破産するということになります。一九三四年には、日本にいる朝鮮人の数は五三万七千人までに達しました。日本に朝鮮人が最も多くなったのは一九三〇年から一九四五年までのことです。日本がいわゆる十五年戦争を引き起こし、中国をはじめアジア太平洋の広範囲にわたって戦争が拡大されたのですが、一九四五年には二百三十万の朝鮮人がいたといわれています。その主な理由は「強制連行」によるものでした。この時期に日本に来たほとんどは、今日の聞きなれた表現ですと「拉致」という言葉がぴったり来るのかもしれませんが、そのような形で連れてこられたのです。その多くは戦後帰って行くのですが、帰ることが出来ない、あるいは残らなければならない、様々な事情で多くの人々が在日として日本に残ります。私の父親は一九三五年に日本に聖書と讚美歌と運動靴をもって、釜山から下関に渡る船（関釜連絡船）ののって、後に母も日本に渡ってきて、私が生まれました。現在の韓国の大統領李明博さんも一九四一年に大阪市平野区で生まれて幼少期を過ごしたということですが、彼は韓国に帰った人です。

## 在日の差別について

西宮で生まれ育った私は、幼い時は、差別を受けるということが普通のことでした。ここでは、個人的に受けた、あるいは身近な差別体験についてお話いたします。私が幼稚園に行く前、三歳か四歳のころであったと思います。近所の同じ年頃の友達の家で遊んでいたのですが、その友達の父親が夜勤から帰ってきた。そして、いきなり近くにあった、赤い消防車のおもちゃを私に投げつけて「朝鮮人出て行け。」と大きな声で怒鳴られたことがありました。もちろん私は必死で逃げました。その時のことを私は今でも昨日のこのように覚えています。その驚きと恐怖は今でも忘れられません。しかし、差別が社会化された時にもっと大きな力を持って人間を押しつぶすことができるものであることを成長とともに知らされることになります。

## 中学入学前の校長からの手紙と中学卒業後の同窓会

私の通った中学校は「西宮の学習院」といわれた、校区から被差別部落の区域をはずした、いわゆる“良い学校”でした。小学校を卒業して最後の春休みにその学校の校長から手紙が来ました。その手紙を受け取った父親が私を呼んで、座らせました。そしてこの校長の手紙を見せて言ったのです。「お前は、日本人ではないから、もし中学校で問題を起こしたら、退学にするかもしれない、そういうことが書いてある」というのです。

この「日本人ではないから」という言葉は、鈍感な私にも大変なショックでした。日本人でない自分は義務教育も受ける権利がないということだからです。しかも、この世で最も頼りにしている父親の口から出された宣告として、私に伝えられたからでした。現在、「教育」

に携わるものとしてこのことを考えますと、残酷極まりない手紙でした。その校長は温厚篤実をもって知られた人で、後に市議会議員になった人です。

中学卒業後 同窓会から案内の手紙が何回か来ました。その後、私は自分の正体が何であるということを友人たちに伝えたくになりました。それで同窓会の役員をしていたクラスメートに手紙を書きました。「自分は実は韓国人で、本名は金永秀（キム ヨンス）です。これからこの名前で案内を送ってください」

そうしますと、それまで来ていた同窓会通知が一通も来なくなりました。それから三〇年以上も経って西宮に帰った時、兄と駅前のお好み屋に入りましたら、お好み屋の主人が中学三年生の時の同級生でした。彼は、私に同窓会三〇周年の記念写真を見せてくれました。懐かしいはずの“友人”達と、三年生の時の担任の先生の笑顔が映っていました。

#### 自殺した在日の少年

自分が将来の仕事が牧師ということに定めたのは、大学を卒業してからです。牧師になるために神学校（牧師になるための学校に）で学びはじめたのですが、そのとき衝撃的な事件が起きました。林賢一（イム ヒョンイル）君という在日三世の少年が自殺したのです。一九七九年九月九日のことです。当時、彼は埼玉県の上福岡第三中学校一年生でした。近所のマンションから飛び降り自殺をしたのです。調査していくと民族差別が大きな要因だったことがわかったのです。あまりのいじめに耐えかねて賢一君は二度自殺を試みて、二度目に帰らぬ人となったのです。六月十八日の夕方、林君は上記の書き置き

を残して自宅から消えました。

一度自殺を試みたイム君は、全身びっしょりでかえってきました。「お母さん、こわかったよう」と母親に抱きついたといいます。事情を聞くと、駅近くの高層マンションから飛び降りようとしたが、下を見るうちに恐くなったのです。その後、林君へのいじめはエスカレートしていきます。「自殺野郎」「家出っ子」「林死ね、死ぬ勇気もないくせに変なことしやがって」といじめが教師の目の届かないところで巧妙に行なわれるようになり、特に卓球部の集団暴行はひどいものだったといいます。

学校に行かなくなった賢一君を父親が車で探しあてて話し合った時、「僕はずっと我慢してきたんだ。でも、もう我慢できないよ。昨日だって…」と逆立ちで教室を歩かされたことなどを賢一君は訴えました。翌朝、日曜日ということで林君は新調の空手着を着て家を出てマンションから飛び降りたのです。

林君の死が学校に知らされると、いじめていた同級生は「バンザイ!」「あいつ死んじゃった」とニコニコ飛び回っていたといいます。市教育委員会での「調査報告書」は、「クラス内でいじめはなかった」「(林君は) いざこざの多い生徒であった」と報告しました。賢一君の死後、姉が持ち物を整理していると、賢一君の小学校時代の卒業サイン帳を見つけた。それには次のようなことが書かれていました。「林へ。一生のおねがいです。…死んでください(今すぐに)。…ただうれしいことといえば林と別れることであります」(女子)

先程も言いましたように、この事件は私が大学を出て神学校に在学中におこりました。その時、私は思いました。「このような子供が自分の教会にきたならば、何を教え、何を語り、何を伝えることができ

るのだろうか」。ちょうどその時期、私自身親友と思っていた人に在日の差別の問題を語ったところ、「金君、それほど差別があるというのなら、韓国に帰ればいいじゃないか」と言われて大きなショックを受けた時期でもありました。思えば、私自身ずっと「帰れ」「出て行け」と言われて来た。でも、私の故郷は西宮なのです。このようなことを経験する中で、自分が日本社会でどのようなところに位置する存在なのかということ強く考えさせられたのです。

自分は一体何者か？何故自分は日本にはならないと言われなければならないのか、差別されなければならないのか？その答えを見つけないとできない私は牧師になることをやめようと思いました。その答えを探せないで、同じ悩みを持つ人々に語るものを持たないではないかと自問したのです。その答えを探すため、私は韓国に留学に行きました。自分の両親と先祖の言葉であるハングルと信仰のルーツでありました、韓国教会の歴史を中心に勉強することにしました。それで答えを見出せないのなら、牧師になることをやめようと思っていたのです。そういう思いで留学をしたのですが、韓国教会の歴史を学びながら発見したのは、それまで日本の教育で教えられなかった近代の歴史であり日本との関係の歴史でした。

知らないことを学ぶことによって与えられる力があるということ、当たり前のことですが、体験的に気付きました。それと共に“知らせないこと”は、一つの教育的意図が含まれているということにも、これも当たり前のことなのですが気付くのです。

## 韓日の歴史の学び

初期の韓国キリスト教会の歴史は日本の植民地支配の歴史と多くの部分で重なります。私が韓国で教会の歴史を勉強した時に最初に受けた衝撃は、知らされていない基本的な歴史的事実を確認することからでした。例えば日清戦争が平壤を戦場としたことなどは、日本の学校の歴史の時間には普通触られることはありませんが、そのことを明確に知ることになります。余談になりますが、京都大学の友人に日清戦争の戦場がどこだったのかを後日聞きましたが、「よく知らない」というのです。日本の教育ではそういうことはほとんど教えられないで通り過ぎるのです。しかし、その戦場になったのは朝鮮の地でした。よく思い出すと、かつての教科書の挿絵に戦場で嘆き悲しむ朝鮮の人の絵があります。しかし何の説明もされていません。

日本の教科書で取り上げられないことは他にも多くあります。李氏朝鮮第二六代王・高宗妃 明成皇后（閔妃・ミンピ）が殺害されたのは、日清戦争の後の一八九五年十月八日のことでした。この日の早朝、朝鮮王朝歴代の王宮、景福宮（キョンボックン）に侵入した日本兵士等、武装した者達が王妃を殺害・焼却しました。これは当時の日本公使三浦梧郎が主導したものでした。彼はどのような人物かといいますと、長州藩出身の軍人であり政治家です。戊辰戦争に奇兵隊員として参加、西南戦争では第三旅団司令長官として西郷隆盛率いる反乱軍を鎮圧します。一八九五年、在朝鮮国特命全権公使に就任して公使館付武官で朝鮮政府軍部顧問の楠瀬幸彦中佐や、日本語新聞の「漢城新報」社長の安達謙蔵らの協力でこの暗殺を指揮、事後日本に召還されて軍法会議によって日本人関係者は全員無罪となり釈放されました。後に枢密院顧問などの要職につく人物です。

その他、この事件の主な関与者達はどうなったのでしょうか。楠瀬幸彦は事件後日本に帰国、陸軍の要職を経て一九一三年には陸軍大臣になりました。又、安達謙三も帰国して熊本国権党を結成、一九〇二年の衆議院選挙で初当選し、一九一四年の大隈重信内閣の総選挙で立憲同志会（後の民政党）の選挙長を務めて大勝し、「選挙の神様」と評され逋信大臣と内務大臣を歴任しました。つまり、日本の軍事、政治の有力者たちが、朝鮮・韓国併合の裏方で血塗られた関与をしていたということです。このような経過をたどって日本は韓国を併合するのです。

一方で、このような武力で圧倒するようにして併合された韓国の民衆の声はどのようなものであったのか、以下見たいと思います。張志淵（チャン・ジヨン）という人が「保護条約」が締結されたことに対して『皇城新聞』の論説でこのように書いています。

この日にこそ大声で慟哭せよ。先日伊藤博文が韓国に来た時、愚かな我が人民は互いに言った。伊藤は三つの釜の足が互いに依存しあって安定するように、東洋三国（清・韓・日）の安寧を担って周旋してきた人物なので今回の訪問は我が国の独立の基盤を固くするためであると、仁川港からソウルまで官民あげて最高の歓迎をした。しかし、世には想像することが難しいことが多い。…我が政府の大臣と称する者たちが私的な栄華を捨てきれず、威嚇に恐れをなして売国の逆賊となることに甘んじ四千年の江土と五百年の宗廟事跡を他の国に献げて二千万同胞をまとめて他（国）の奴隷にした…アー恨みと憤りよ。他国の奴隷にされた我が二千万の同胞よ、生きるべきか死

ぬべきか。(拙訳)

日本による韓国の併合に対する激しい失望感と怒りが表わされています。日本では、ほとんど教えられない、又感じさせられない隣人(国)との関係の歴史は、実は併合された側の怒りと憤りを封印する一方で、そのことに携わった人々の罪を隠蔽するだけでなく栄達の道を備えたということです。日本の学校教育で教えられない日韓の歴史を知ることが、自分の日本における位置を教えてくださいました。

## 韓国教会と日本の支配

### キリスト者の抗議行動

さて、日本の支配に対して、韓国のキリスト者の対応はどのようなものだったのでしょうか。安重根（アンジュンゲン）というカトリックの信者は、一九〇九年ハルビン駅で明治の元勳と称えられる伊藤博文を銃で狙撃した人物です。勿論、これを当時の日本のキリスト教指導者達が批判したのは言うまでもありません。日本の教科書でも暗殺というように描かれていますが、彼自身は、単なる暗殺ではなく韓国独立軍の将兵としての戦闘行為という自己理解していたとはっきりと明言しています。

又、プロテスタントの信者でチャン・インファンを中心とした五名が、その一年前、日本の朝鮮支配に大きな役割を果たしたスティーブンス（Durham W. Stevens）というアメリカ人官僚を射殺しました。スティーブンスは一八八三年から一九〇四年までワシントンの日本公使館の首席法律顧問をした人物で、日米の政府間を取り持って朝鮮が

日本の支配下になることに尽力したからです。一九〇八年日本政府の意思をワシントンに伝えるためにアメリカに帰ってきた彼を、五名の韓国人がサンフランシスコで待ち伏せて射殺したのですが、彼等はサンフランシスコ韓人メソジスト教会に毎週通っていたことが分かっています。

李東輝（イー・ドンフィ）という人物は朝鮮独立のパルチザン運動の初期の指導者として有名です。もともと大韓帝国の軍人でしたが、「大韓帝国軍」の解散により社会主義系列の独立運動家となりました。咸鏡道、平安道、北間島（現在の中国東北部の韓半島隣接地帯）、沿海州の韓人社会等で活動しました。キリスト教の伝道師でもありましたが、独立運動に参加して武力闘争を指導することになり、やがて共産党に入ります。ロシア革命を成し遂げたレーニンにも直接出会って運動資金を調達したということまでした人物です。彼は一九一九年の大韓民国臨時政府国務総理を歴任します。キリスト教の伝道者と共産主義者という二つの矛盾したものが重なるということでは非常に珍しい人物です。

以上のようなことを言いますと、韓国の教会はまるで武力闘争しかしてこなかった、異常な教会であるというように誤解されるおそれがありますので、これらが特別な例であることをハッキリと申し上げたいと思います。韓国の一般的なキリスト教会そのものがこのような武力による闘争をおこなったものではありません。ただ、その様な独立を求める多くの人々が教会にかよっていたということです。時代が、韓国を亡国へと追い込んで行った、日本との特別な政治的關係にあったことを理解しなければならないと思います。又、このような特別な状況の中、啓蒙的で平和な活動による独立運動に、より多くのキリスト

者がかかりました。その中でも最も有名なのが三一独立運動といわれるものです。

### 韓国の教会と三一独立運動

第一次世界大戦末期の一九一八年一月、米国大統領ウィルソンにより「十四か条の平和原則」が発表されました。これを受けて、民族自決の意識が世界で高まりますが、韓国でも同じでした。後に文学者として有名になった李光洙ら留学中の朝鮮人学生たちが東京の神田のYMCA 会館に集まり、「独立宣言書」を採択（二・八宣言）し、これを韓国に持ち帰ったのですが、これに呼応したキリスト教、仏教、天道教の指導者たち三十三名によって、三月三日に予定された皇帝高宗の葬儀に合わせ行動計画が定められました。皇帝は日韓併合を自ら願ったという文書をパリ講和会議（ベルサイユ条約）に提出するよう日本政府に強いられ、拒否したため毒殺されたと言われています。この皇帝の死を契機に独立運動が韓半島全土に広がります。その時の独立宣言文にはこのようにかかけられました。

「吾らはここに、我が朝鮮が独立国であり朝鮮人が自由民である事を宣言する。これを以て世界万邦に告げ人類平等の大義を克明にし、これを以て子孫万代に告げ民族自存の正当な権利を永久に所有せしむる。」

発端となった民族代表三十三人は逮捕されましたが、パゴダ（現在のタプコル）公園には数千人規模の学生が集まり、その後市内をデモ行進した。道々「独立万歳」と叫ぶデモには、次々に市民が参加し、

数万人規模となりました。以降、運動は韓半島全体に広がり、数ヶ月に渡って示威行動が展開されました。三月から五月にかけて集計すると、デモ回数は一五四二回、延べ参加人数は二〇五万人に上ります。これに対し朝鮮総督府は、警察に加え軍隊も投入して治安維持に当たったのでした。韓国教会史の専門家であるミン・キョンベという韓国教会史の研究者は「教会のあったところと運動が起きたところが殆ど一致する」といいます。

金山（クムサン）という人物が若い時に三一独立運動に参加してその経験談を以下のように証言しています。

「運動の終息する五月二十日までには総計三十万に及ぶ人々を逮捕した。病院も学校も監獄に転用され、私の中学校も仮留置場になった。三分の二は短期間拘留されたあと、むち打たれてから放免された。…死刑になったものはなかった一死刑にするような合法的な口実がなかったのだ。…「死刑は殺人の場合以外適用できないから、日本人は逮捕する代わり民衆を街頭で殺した一うまい手だ。…鎮圧期間に七千近い朝鮮人が殺された。残虐行為のうわさが刻々と伝わってきた。…水原附近で三力村が焼かれた。ある村で日本人はキリスト教会に火を放ち、逃げ出そうとする人々を撃った。定州でも教会が日本の報復の中心になった。これら二件で死傷者が千人ほど出た。アメリカ人宣教師たちはそのため大いに憤慨した。あるアメリカ人は朝鮮人学生を一人家にかくまったことで逮捕された。…また別の事件が大邱の近在で起こった。そこでは二千人ほどの農民が駐在所

の前で示威行動をしていた。「お前たちの望みどおり朝鮮の独立を政府へ電話で頼んでやったから、すぐ返事が来るだろう。お役人方がいま会議をしているから三十分待ちなさい。それから家に帰ればいいだろう」。単純でまっ正直な農民たちがその言葉を本気にして待っていると、日本軍が三台の自動車で駆けつけて、逃げおくれた三十人を殺した。…教会が日本の憤激をあつめたわけは、それが宗教的自立性と並んで協同の精神を象徴する存在であり、また当時朝鮮において顕著だったアメリカの影響の中心をなしていたからである。日本人は市内の全教会を占拠し、宗教集会を禁じた。

三月一日以前には私もあたりまえに教会に通っていた。キリスト教会が朝鮮でいちばんすぐれた施設であることは明々白白であったが、お祈りは無益だと思っていた。」(ニム・ウェルズ著『アリランの歌』より)

このように、三一運動について金山という名で証言した人物は、後にキリスト教による非暴力運動に見切りをつけて共産主義による暴力革命に身を投じていきますが、この運動は後にマハトマ・ガンジーやM.L キング牧師の思想に共通する「非暴力平和主義」と評価されることになります。その運動に対する弾圧の残虐さは当時韓国にいた西欧の宣教師達の報告から世界的に知れわたり、日本政府を震撼させることになります。その残虐さで最も有名な例が、堤岩里(チェアムリ)教会事件です。その時の写真が今でも残っています。時間の関係上、詳しくは話することができませんが、教会に男性の信徒達を閉じ込めて外から火を放つという形で残虐な弾圧を加えたことはよく知

られています。

### 神社参拝の強要について

韓国教会の歴史において日本の政治思想の宗教性が明確になったのは、神社参拝強制の問題です。日本が十五年戦争に突入する時代に、朝鮮の人々に対して総督府は神社参拝を強要して行きます。明治以来神社の頂点には天皇家の先祖を祀る伊勢神宮がありますが、朝鮮にも神社が建てられていきます。

朝鮮人に神社の参拝を何故強要したのか、何故強要しなければならなかったのか？この問題は今日の学校現場で起こっている、「日の丸」「君が代」の問題に本質的に共通します。しかも、教育の現場から起こったということは忘れてはいけないと思います。神社参拝を強要する時に、多くの警察が口にした言葉が「天皇陛下とキリストはどちらが偉いか」でした。日本の津々浦々にある神社とは何かの問題について、考えざるを得ない問題でもあります。

明治憲法によって、「万世一系」の天皇が日本を統治することが法的に定められましたが、その宗教的・政治的思想によって全国の神社は体系化され、伊勢神宮を最高にして組織化されました。当初、全国の神社は全て官有となり、全神職は官僚待遇（神官）となりました。官弊社の神職には位階、勲等を付与し、退職後の恩給制度も整備しました。要するに、神道をもって日本の宗教を統一しようとしたのが、明治維新の本質でもありました。「信教の自由」との関係上、当時日本政府は、神道は宗教ではない国民の道徳である（神社非宗教論）」という法解釈を打ち出しました。要するにどの宗教を信じてもいいけれども、神社だけは宗教ではないものとするので参拝せよということ

なのですが、それが植民地にも波及しました。そのことに最も抵抗を示したのが朝鮮のキリスト者だったのです。それは、政治的なものとして反対されたわけではありません。純粋な宗教的反対理由によるものだったのです。聖書には神以外のものを礼拝することを禁じるという基本的に重要な教えがあります。そのことに、神社参拝は抵触するのです。

朝鮮の神社についてご説明いたしますと、最初ソウルの南山に朝鮮神宮（一九一九年）が建てられました。今ではソウル観光のスポットになっていますが、観光の名所明洞<sup>ミョンドン</sup>はこの山の麓に位置します。そして一九四二年まで朝鮮各所に一三七社が建立されました（日本の全植民地の神社数一六五）。朝鮮神宮は天照大神と明治天皇を祭って皇室尊崇のためのものでした。そして、神社参拝が最初に強要されたのは、平安南道（現在は北朝鮮）の安武知事のときでした。満洲事変の際に、戦没将兵慰霊祭への参席をすべての学校に要求したときです。はじめはキリスト教主義学校に要求。やがて、教育の場からあらゆる宗教団体に要求されるようになったのです。当時の朝鮮で最も影響力のある宗教団体はプロテスタント教会でした。中でも長老教会は最大の教派です。一九三八年九月十日、その韓国キリスト教長老派第二七回総会において、警察が総代である牧師や長老達に圧力を加え参拝を可決させるのです。これに象徴されるように、朝鮮のキリスト教信徒は神社参拝をするよう義務づけられました。これによって約二千人の牧師・信徒が逮捕され、二百余りの教会が閉鎖されました。神社参拝を拒否した人の内五十名は獄死いたします。この歴史は韓国が日本支配から解放された後も影響が続き、韓国教会は神社参拝をしたのか否かで真二つに分裂するという歴史を辿りました。

## 朱基徹牧師

この神社参拝の強制に強く反対したのが朱基徹（チュ ギチョル）牧師です。この人は神社参拝に対する反対をして獄死しました。韓国の教会では神社参拝に最後まで反対した殉教者の、象徴ともいえる存在になっています。

彼は、神社参拝が聖書の禁じる偶像礼拝であるとして神社参拝反対案を提出しました。約二百人の牧師たちに向かってした説教「一死覚悟」は今もよく知られています。強固な反対をする朱牧師はじめ朝鮮のキリスト者に対して、一九三八年六月に日本の教会（政府）が説得する人物を平壤に差し向けます。「日本キリスト教会」大会議長の富田満という人です。この人は後に日本のキリスト教会を一つにまとめた「日本基督教団」の初代統理になっていきます。彼は日本政府の見解に従って「神社参拝は宗教ではない」と主張しました。その富田に対して、朱牧師は神社参拝が偶像崇拜だと明言します。富田は反論します。その富田にたいして朱牧師は「富田牧師、あなたは豊かな神学知識をもっておられる。しかし、あなたは聖書を知りません。神社参拝は明らかに第一戒を破っているのに、どうして罪にならないと言われるのですか。」と喝破したのです。

神社参拝を拒否した朱基徹は四度投獄され、五年間獄中にあった。その中でも義城警察署の拷問が最も酷かったといえます。電気ショックを受け、木刀で殴られ、生爪をはがされ、尿道にアルコールランプの芯を差し込まれます。そして動揺させるため拷問の様子は、一時釈放をしたりして家族に見せつけられますが、最後まで屈しませんでした。彼は日本の警察に拷問されている時でも、「人間はすべて同じ、天皇も、（キリストの）神を信じず過ちを犯せば地獄に落ちる」と答

えました。凄まじい拷問の末、朱牧師は一九四四年四月に平壤刑務所で亡くなりました。拷問で爪はすべてはがされ、遺体は骨と皮だけになっていました。

### 織田樞次（田永福）牧師

時を同じくして、同じ朝鮮で朱牧師と神社参拝に真っ向から反対した日本人牧師がいたことは注目に値すると思います。織田樞次（朝鮮名：田永福）という人物です。織田信長の直系の子孫なのですが、日本の教会の朝鮮伝道の歴史上最も注目される人物のうちの一人でもあります。それは、日本の牧師でありながら抑圧される朝鮮人の側にたった例外的な存在だからです。この人は、ハンゲルで朝鮮の人を対象にして伝道をした人です。当時の日本の教会のほとんどが、朝鮮にいる日本人を対象にした伝道であったことと較べると大きな違いがありました。織田牧師は神社参拝強制に反対する説教をしました。聖書の中で罪というのは、酒や煙草をやるということではなく、「偶像礼拝」をすることだといってやはり逮捕されて拷問にあうのですが、日本人ということと、織田牧師のことを取り調べた検事が織田牧師の伝道の思いを知って不起訴になって助かります。織田牧師は戦後、日本に帰り、在日の韓国人による教会である「在日大韓キリスト教会」の牧師として生涯を閉じるまで献身します。

ここまで、韓国のキリスト教の歴史と日本の支配の関係について断片的にお話しいたしました。なぜ、このような弾圧がおこなわれたのか。その歴史は、実は最初にお話ししました私自身の被差別の経験や日本社会が深い部分でもっている思想と無関係ではなかったというこ

とを一言付け加えておきます。

### 支配する意識・思想の問題について

日本では、明治以降ほとんどの人々が国家の方針に無批判であったというのは言い過ぎかもしれませんが、少なくとも国家の戦争に対する徹底した平和思想を貫くとか、他のアジアの人々に対する差別意識を根本的に批判した人というのは数少ないと思います。むしろアジアの隣人を貶め、他国への侵略を容認する思想、戦争を是認する思考が圧倒的でありましたが、それこそが問題であると思います。

先日のNHKのテレビ番組をみていますと、日中戦争に参加したある元日本軍兵の証言がありました。その人は戦争が長引くので「なぜ戦争をし続けるのか？」と上官に質問したところ、上官は「中国はいつも内乱ばかりするので、天皇の徳を教えるためである」と答えたということでした。そのような勝手な論理がいつの間にか普通のこのように浸透していくということが根本的な問題ではなかったかと思います。

明治を代表する、いわゆる啓蒙思想家といわれた福沢諭吉は、「人の上に人をつくらず、人の下にひとをつくらず」といういわゆる「四民平等」を説いたといわれますが、一方でいわゆる「脱亜入欧」（アジアを脱して西欧社会の仲間入りをする）思想を鼓吹した人物として有名ですが、中国や朝鮮に対して軽蔑の念を表しています。

「我日本ノ國土ハ亞細亞ノ東邊ニ在リト雖ドモ其國民ノ精神ハ  
既ニ亞細亞ノ固陋ヲ脱シテ西洋ノ文明ニ移リタリ然ルニ爰ニ不

幸ナルハ近隣ニ國アリ一ヲ支那ト云ヒ一ヲ朝鮮ト云フ我國ハ隣國ノ開明ヲ待テ共ニ亞細亞ヲ興スノ猶豫アル可ラズ寧ロソノ伍ヲ脱シテ西洋ノ文明國ト進退ヲ共ニシ其支那朝鮮ニ接スルノ法モ隣國ナルガ故ニトテ特別ノ會釋ニ及バズ正ニ西洋人ガ之ニ接スルノ風ニ從テ處分ス可キノミ惡友ヲ親シム者ハ共ニ惡名ヲ免カル可ラズ我ハ心ニ於テ亞細亞東方ノ惡友ヲ謝絶スルモノナリ

難しい昔の文体で、理解できる学生さんがどれほどいるのか分かりませんが、要は、日本はアジアの頑固な後進性を脱出して、西洋文明に移行した。中国や朝鮮という隣国が同じように開明な国になることを待つ余裕はないので、西洋人がするようにこれらの国を処分する。悪友を謝絶すべきだというようなことを主張したものです。やがて、そのような意識がアジアに対する植民地政策、戦争政策を正当化し、それからの対アジアの歴史を生み出すことになるのです。

このようなアジアへの差別的思想は、政治家や一般人のみならず同時代の夏目漱石のような日本を代表する文化人においてもみられます。彼がそのような中国、朝鮮に対して差別意識をもっていたことが、一九〇九年の『朝日新聞』に連載された「満韓ところどころ」「満州鉄道総裁」に載っています。ここで、中国人に対する蔑称「チャンコロ」と同じような「チャン」とか「チャンチャン」と書き。朝鮮人については、朝鮮人車夫の引く人力車に乗って乱暴なので「仕舞に朝鮮人の頭をこきんと張り付けて遣りたくなった」と書いているのです。一般日本人の蔑視的中國、朝鮮觀をそのまま表現していると思います。又、「満韓視察談」という一文では、平壤大同江の「浮碧樓」という名勝地に行ったとき。遊び人風で腹巻に上半身裸の風体の日本人三人が大

阪弁で下品に口げんかをしているのに出くわすのですが、その日本人の傍らを風雅な朝鮮人が通り過ぎるのを見て、「風雅なる朝鮮人冠を着けて手を引いて其下を通る。実に矛盾の極なり」と書いています。日本人が下品で、朝鮮人が風雅であることが矛盾であるという、そのステレオタイプ的な思いの底にある蔑視感から、漱石ほどの文学者も自由ではなかったということですが、そのような差別的感覚は、政治的に作られたものであったということを知る必要があると思います。しかし、漱石ほどの文化人でさえ、そのことに無感覚に従ったのです。

とりとめもなく、歴史的なことを申しあげましたが、このような歴史と自分の経験が深いところで関係することに気付いていきます。自分が、いままで日本の学校教育で教えられることの出来なかった自分のアイデンティティーに関わる歴史的な事実を知ることによって、自分の中で何かが変わっていきます。日本と韓国を冷静に受け止め分析する中で、新しい視点をあたえられ自分自身が変わられていく経験です。それは、私自身を解放する生き方に繋がるものとなりました。

### イエスの宣教の最初の言葉：「悔い改め」

さて、自分を解放するのに重要な学びとして聖書の学びをあげたいと思います。聖書の中には六十六の書物が含まれていますが、その中のマルコによる福音書の最初の部分を皆さん方にお配りました。このマルコによる福音書一章十四節はイエス・キリストが、その伝道を始めるにあたって最初に語った言葉であります。

ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

聖書の中でも「福音書」という文書にイエス・キリストの宣教活動とその教えそしていかに十字架にかけられて死に、いかに復活したのかということは、特別に記されています。この「福音書」は四人の著者が書くのですが、そのうちマタイとマルコという人物が、いずれもイエス・キリストの活動のはじめに「神の国は近づいた」ということと「悔い改め」という言葉を発したということで記録しております。それは只の偶然ということではありません。主イエスが何を教えたのかということの中で最も重要な言葉の一つ、或いは最も核心を表す言葉、教えの全体を最も要約した言葉が語られたと見るのが自然であると思います。ですから、主イエスが人々に最も伝えなかったメッセーヂの要約のような形であらわされていると考えることができるのです。

特に十五節の、「悔い改め」ということの意味を考えたいと思います。日本語で「悔い改め」とは、何か悪いことをした時に深く反省をする、もう二度と同じ過ちは犯さないと言うことを誓うというような意味合いで使われる言葉です。今日、この場に集っている皆さんの中には「私は何も悔いるような悪いことをしたことはない」と主張する人がいらっしゃるかと思います。しかし、聖書が語る「悔い改め」という言葉は、単に犯した悪事を反省するとか、単に悪いことをしないと誓うというようなことと、少しく違う言葉の意味を持っています。ギリシャ語ではメタノイアーというこの「悔い改め」の言葉は、それ以上の意味が含まれています。それは、一八〇度の転換、あるいは転回

して、原点に帰るということです。いつの間にか、人として当たり前の生き方。神によって愛されるようにと作られた人間存在であるはずなのに、その道から外れてしまっている。そのような私達人を愛し愛されるという原点に帰ることが示されている。つまり、神に創造されたあるべき姿への回帰ということができると思います。それは、法的な犯罪について関することは勿論、倫理的なことをも越えた事で言われています。

その一例として、このようなイエスの教えのエッセンスのような勧めがなされた後で、マルコ福音書の四〇節には穢れた者を清める「イエス」の姿がでてくる。当時の社会で病気であるが故に汚れているとされた人をいやすのです。その病気は、聖書の翻訳によっては「らい病」（ハンセン病）とされるほどの重い皮膚病でありました。もしそれが、ハンセン病であれば重大な感染症と考えられます。日本でも、つい最近までハンセン病の人々が、必要もないのに隔離されてきた差別的な歴史が大きな問題となりました。その症状は、重傷になると手足、眼や鼻が落ちてしまうというものです。人々は当然恐れて近づかないのです。ユダヤ教の律法にもはっきりとそのような人は汚れており、近づいてはならないことが明記されています。当時、人々はこのように穢れた病人をみると石を投げてその距離を測ったのです。しかし、イエスがその「穢れて」近づいてはならないはずの人に近寄り、「触る」ということで癒すことが書かれています。

触れた人はどうなるかといいますと、その人も穢れたものとされるのです。そのようなことを考えますと、イエスが触ったということは、あるべき人間関係から逸脱して、支えあうべき病人を徹底的に追いやってしまう人々の中にある戒律主義、律法主義、偏見、差別意識

から原点に戻ることが行動で示されたということです。法律や社会のシステムの中に潜む、人間としてのあるべき姿勢を破壊するものの存在を厳しく見据えて、これに抗議し、人間性回復の原点を示した行為であるということが出来ます。

私達は果たして、社会に生きてどれほど人間として本来的に守らなければならないことを見据えているのでしょうか。日本人であるからとか、韓国人であるから、中国人、アメリカ人、ヨーロッパ人という範疇では当然捉えられませんし、時として支配者側、被支配者側ということの立場を超えるようにと示されるときがあります。

#### 江渡狄嶺について

この様な人間としての原点に立ち返って生きるということで、私が思い出すのは、関東大震災で朝鮮人が約六千人殺された歴史についてです。多くの人々が偽の情報によって、朝鮮人というだけで殺す側についたのですが、一方で朝鮮人の生命を守った少数の日本人がいたということです。

関東大震災の時、金三奎（キム・サンギョ）という植民地朝鮮から東京大学に留学していた人がいました。この人は後にソウル大学の教授から韓国を代表する新聞である「東亜日報」の編集長もする様な一級の文化人ですが、身の危険を感じて江渡狄嶺（えどてきれい）というお百姓さん（東大中退のトルストイ主義）にかくまわれて殺されずに済んだ人です。彼が、その当時のことをこのように書いています。

「江渡さんの家にたどり着いた時分には、もうとつぷりと陽が落ち、あたりは真っ暗でした。伊藤証信さんの紹介ということ

もあったのでしょうか、江渡家では心よく私たちを迎え入れてくれました。…奥さんが私たちを別棟のお堂に案内し、布団を敷き蚊帳をつつてくれました。私は床にはいったのですが、うつらうつらしていて、あれは何時だったのでしょうか。夜もだいぶ更けた頃でした。突然、太鼓の音と鬨の音が起こり、あっちへ行ったら、こっちへ行ったらと、大きなよめきがあったのち、一発の銃声が響きました。追いつめられた同胞が、殺されたんだ…。私は隣に寝ていた兄に、思わずすがりついて泣きました。」

金さんは三ヶ月ほどかくまわれた後、状況が落ち着いたので東京にもどったのですが、彼らをかくまっていることが知れたら、江渡さんたちも無事ではすまなかったであろうと思われます。

あの有名な杉原地蔵が、ナチスからの亡命ユダヤ人を救うために行動し、外交官を日本政府から解任されながらも最後までユダヤ人へのビザを発行し続けたこととはつとに有名な話ですが、江渡さんの行動はこれに共通すると思います。本当に人間としてなすべき行動が何かを見逃さない、本当にすごい日本人の姿をみる思いがします。それは、冷静に考えてみるならば、人間としては当たり前の、原点にしっかりと足をつけたからこそできた行動ではなかったかと思うのです。人間としての原点を見失わないことこそが、当たり前の偉大さなのだと思います。

## おわりに

マルティン・ルターと共に、ジャン・カルヴァンという宗教改革を

おこなった神学者の名前をご存知の人も多いかと思います。このカルヴァンが『キリスト教綱要』という有名な書物を著しましたが、その第一章の冒頭で自らの神学の原則を示す重要な言葉を残しています。

「われわれの知恵で、真理にかない、又堅実な知恵とみなされるべきもののほとんどすべては二つの部分から成り立っている。神を認識することと、我々自身を認識することである。」

神学というと、形而上的なもので神の世界についてのお話であって、人間世界の科学や学問の探求とは関係の無いものであるというように思う人も多いかと思います。しかし、カルヴァンというプロテスタント・キリスト教を代表する思想家は、真実の見極めにおいて現実世界に生きる「我々自身を認識すること」、つまり自分の発見、隣人の発見が不可欠であることを述べているのです。自分を本当の意味で認識することは、それほど簡単なことではありません。しかし、人としての原点に立ち返り、自分が社会と歴史の只中でどこに位置しているのか、又、あるべき位置とはなになのかを追及する重要性を語っています。逆に言うならば、私達人間自身の認識をしっかりとしないならば、神様をしっかりと認識することも出来ないということにもなるとおもいます。

本日は「日韓併合百年」を思い、皆さんと同じ日本社会に住む一人の「在日コリアン」キリスト者の一人として、私自身の歴史と原点に関する話を話させていただきました。話の内容がいろいろと行き来しましたが、どこかで、皆様の生き方の原点とも重なってほしいと願っております。ご静聴を感謝いたします。

# 「人はいかに生きるべきか」 —驚く、頑張る、交わる—

東北大学・仙台白百合女子大学名誉教授 岩田靖夫

今日は、皆さんが、一人前の人間として生きてゆくための大原則を三つばかり話します。

最初に、話の前提として、現代がどのような時代かということについて、一言、話します。現代はとても悪い時代です。

わが日本国は、今年の三月に大地震と大津波に襲われ、これと連動して、原子力発電所の爆発があって、国家的な危機に見舞われています。しかし、これについては、別に、書いたものもあり（「大災害についての哲学的考察」、『思索』第四十四号、二〇一一年一〇月、東北大学哲学研究会。）、ここでは取り上げません。

ここでは、現代の一般的特徴について一言します。今は、世界全体が未曾有の金融危機とか経済危機に瀕している、と言われていています。確かに、そうです。世界中で、企業が倒産し、失業者が巷に溢れ、新しい職場を見つけられない人々が住む場所を追い出されてホームレスになる。わが国では、自殺者が年間三万人を超える。同時に、秋葉原事件に象徴されるような無差別殺人がしばしば起こる。政治家や商人が平気で嘘を吐く。振り込め詐欺などで、老人を騙す人々がいる。

この状況は、しかし、単に経済政策の失敗で起こったのではありません

せん。そうではなくて、人間がモノとして扱われ、人格無視が長い間横行した結果なのです。人間を能力だけで評価し、能力のあるなしで、社会での勝ち負けが決まり、負けた人間は底辺へ転げ落ちる。それを、単に、セーフティーネットとか、福祉政策とか、経済の問題だけとして解決できると思ったら、大間違いです。現代の苦しみの根底には、人間の存在の意味の崩壊があるからです。だから、この危機に瀕した時代を建て直すには、経済的繁栄を取り戻すことが根本の問題なのではありません。人間の生き方を建て直さなければならないのです。

さて、そこで、これから、私は皆さんに三つの極めて単純なことを話します。

第一点。まず、「ありがとう」。朝起きたら、「ありがとう」。昨夜は安らかに眠れて、今日も元気に生きているから。顔を洗って、「ありがとう」。なんと水は冷たく爽やかなことか。空気は清浄なことか。ご飯を食べて、「ありがとう」。お母さん、お百姓さん、太陽、雨、風のおかげです。なんでも、かんでも、「ありがとう」。そうしていると、自然に、嬉しくなる。朗らかになる。元気がでる。

では、なぜ、「ありがとう」か。なぜなら、生きていることが嬉しいから。大昔のギリシアの哲学者アリストテレスは、病気でも、貧乏でも、なにかの挫折で苦しくても、「存在していること自体が嬉しいから」、どんなに外目には悲惨に見えても、人間は生きようとする、と言っています。「存在しない」よりは、「存在する」方が、どんな「存在」でも嬉しいのです。

しかし、「生きている」のは不思議だ。なんだか知らないけど、生きている。元気に歩いたり、食べたり、桜の散る花びらの下で「ああ、

美しい」と感じたりしている。気がついたら、この世に存在していた。だから、自分の存在は、どこからか知らないけれど、どこかからの贈り物です。われわれは、確かに、自分の力や功績で生きているわけではありません。なぜなら、いくら生き続けたいと思っても、われわれはいつか必ず死ぬからです。それで、生きていることに「ありがとう」。

さて、「ありがとう」という気持ちでいると、周囲の人々にもその雰囲気伝わって行って、まわりの人々も朗らかになる。

反対に、朝から不平不満でいると、怒りっぽくなり、悲しくなり、淋しくなり、この世が暗くなる。人にも会いたくなくなり、人からも避けられ、孤独になる。そうして、やがて、病気になる。まわりの人々の気分も暗くなり、世界全体が憂鬱になる。病気というのは、体だけが原因で起こるのではなく、むしろ、心が原因で起こることが多いのです。「病は気から」と言うでしょう。心が不安、不満だと、その結果が体に出てきて病気になるのです。人間の心は大きな力を持っていて、体を支配しているのです。大昔のギリシアの哲学者も東洋の賢者も、みなそう考えていたのですが、近代になって自然科学の発達とともに唯物論が支配的になって、人類は大きな誤りに陥ったのです。体が心を支配していると考えて、体のことばかりに注意を向けたために、人間はみな薬を乱用する病人になり、鬱病になってしまった。

だから、先ず、「ありがとう」で生きる。誰に「ありがとう」を言っているのか。目につくところは、お父さん、お母さん、先生、同僚、友人ですが、本当は、誰だか分からない。目に見えない大きなもの、自分に生命を贈ってくれた「命の贈り手」、山にも、川にも、木にも、草にも、ライオンにも、蛙にも、存在を贈ってくれた「存在の贈り手」に、

「ありがとう」です。しかし、その贈り手は、目に見えないのだから、ただ、感謝の気持ちで、喜んで生きていることが、贈り手に「ありがとう」を言っていることなのです。

第二点。自己として生きる。自分自身になる。自分の人生は自分で決める。自分の人生に責任をもつ。あるいは、自分の人生に自信をもつ、ということです。「生きる」ということは、先ず、その基本において、自分の力で稼いで、ご飯を食べるということです。「働かざる者食うべからず」とはマルクス主義のモットーですが、最初にそう言ったのはパウロです。だから、自力で食べるための力を身につけなければなりません。それが自律（自立）ということです。そして、もちろん、他人と協調し、他人を助ける。人は自立しなければならないが、それは、自分一人が人生を楽しむためではなくて、他人のために働くためです。それが、生きるということです。

福沢諭吉は、明治維新の際に、近代日本を造ったもっとも偉大な人物の一人ですが、かれは欧米留学の後、『学問のすすめ』という書物を著して、その冒頭に「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と書いた。この言葉は「すべての人間は平等だ」という意味です。かれは、それまでの日本の身分制社会を壊さなければならない、と思ったのです。

かれは中津藩（今の大分県）の下級武士の出身ですが、この幕藩体制の中で封建的身分制度の馬鹿らしさを数々経験したのです。かれの比喻によると、封建社会とは、重箱の中にぎっしり寿司が詰め込まれたような社会で、身動きができない。百姓の子は百姓、大工の子は大工、侍の子は侍、大名の子はどんなに愚鈍でも大名になる。これでは

駄目だ。社会の中で、人間は自由に動けなければならない。

それで、かれは、広い世界への窓口を求めて、長崎、大阪、江戸で蘭学を学びました。徳川二五〇年の鎖国の間、わが国はオランダとだけは交流していました。だから、オランダの学問だけが広い世界への突破口でした。そうして、準備をしながら、幕府が倒れる直前、かれは幕府の船に乗って、アメリカ、ヨーロッパを見てきたのです。

福沢は驚いた。当時、日本では馬と駕籠で旅行していたのに、あちらでは蒸気機関車が走っていた。しかし、福沢は科学技術に驚いたのではありません。こういうものは、理屈が分かれば、直ぐに出来る、と一目で分かった。だが、あちらでは、人間が言いたいことを言っている。言論の自由がある。民衆は、政府の役人をお上などと言って恐れない。人間が自分の生きたいように生きている。

これは、いかん。それで、帰国してから、先に述べた『学問のすすめ』を書いた。この本は明治初期の大ベストセラーです。この題名の意味は、「人間は勉強して、人間とは何者であり、社会とはどういう構造をしているか、を知らなければ、支配者の奴隷となって、人間として自立できない」という点にあります。人間は一人一人みな自主独立です。金持ちも、貧乏人も、総理大臣も、みな、同じ人間です。だから、どういう人生になるかはみな自分で決める。勉学するのかしないのか、どんな職業を選ぶのか、結婚するのかしないのか、どんな人生観をもつのか、なにもかも自分の責任で決める。そして、長い人生を経て、その終わりに、自分の人生の責任を誰に押し付けることもできません。全部、自分が背負って墓に入る。だから、何をやってもよいが、その責任は全部自分が背負う。自分の人生は自分が作る。しかし、福沢に納得するのは大体ここまでです。

ところで、他方、誰も否みえない事実として、人間には能力の差があります。だから、自己実現の社会、みなが頑張る社会は必然的に競争社会になるわけです。競争社会には必ず勝者と敗者が出てくる。このことと自己実現をどのように両立させるかということが大きな問題です。

そこで、この問題に対する考え方の基本をごく簡単に言うと、強者と弱者が相互に支えあう、ということです。最初に言ったように、「自分の存在は偶然」でした。だから、自分の存在は贈り物として、どこから贈られてきたのです。したがって、能力もまた偶然の贈り物なのです。それゆえ、能力は自分のものだ、とは言えない。自分が能力を作り出したのではなくて、贈られてきたのだから、自分に委ねられたものだ、と考えるべきでしょう。そもそも自分という者が予めどこかに存在していたわけではないのだから、存在も能力も、すべてが、まるごと贈り物なのです。

アメリカの政治哲学者にジョン・ロールズという人がいましたが、この人は「能力は個人のものでなく、社会の共有財産（common assets）である」、と言いました。人間が自律的に生きる社会とは、人間が自分の能力を十分に発揮して、自己実現を図ることができる社会でなければなりません。だから、能力の十分な発揮を妨げるような社会構造を作ってはいけません。社会主義社会が人間の平等という素晴らしい理想を掲げながら、崩壊した理由の一つはそこにあるのです。言論の自由とか、体制批判の精神とか、企業精神とか、自由競争とかが制限されてしまったことが、社会から活力を奪ってしまった。だから、人間の自由な自己実現を妨げてはなりません。

しかし、能力のある者の稼いだ成果は、自分のためではなくて、

社会のため、他者のために用いられるべきである。これが、能力は社会の共有財産だ、という思想です。

この思想を強烈な逆説によって語ったのが、『マタイによる福音書』の第二〇章にある「葡萄園の労働者の話」です。葡萄の摘み取りの季節になったので、葡萄園の主が広場に行って摘み取りの労働者を集めました。朝早く行って一デナリオンの約束で働き手を雇い葡萄園に送った。それから十二時とか三時とか何度も行って、労働者を雇った。夕方の五時に行ったら、まだそこに何もしないでぶらぶらしている人々がいたから、「なぜ、お前たちは一日中ぶらぶら立っているのだ」と聞いた。そしたら、「誰も雇ってくれないのです」と返事があったのである。そこで、「じゃあ、お前たちも行け」。

直ぐに、日が暮れて、賃金の支払いになったら、皆一デナリオンだった、という話です。それで、朝早くから汗みどろで働いた人は怒って、「こんな不公平な話があるか」と雇い主に文句を言った。夕方五時からの方は、一時間しか働かなかったのだから。

しかし、雇い主は「お前が文句を言ういわれはない」と答えました。「なぜなら、お前は一デナリオで約束したのだから。私は気前がよいので、すべての人に一デナリオ支払いたいのだ」。確かに、文句を言ういわれはありませんね。かれは、一定の約束の下に仕事を貰ったのだから。それ自体が、すでに大きな贈り物です。

朝早く雇われた人は、きっと力の強い丈夫な人だったのでしょう。これに対して、夕方五時の人は、青白い半病人とか、能力に乏しい障害者とか、無力な老人とか、役に立ちそうもない人々だったのでしょう。

この話は実にいい話だ。ただし、この世で行われている正義には反

しています。こんな不正なことはない。こんなことをしたら、どんな会社も多分やがて潰れます。人間社会が崩壊してしまうでしょう。人間社会を動かしている原理はアリストテレスの「配分的正義」という思想です。それによれば、報酬は各人の価値に応じて支払われなければならない。各人の価値とは、労働時間とか、労働量とか、労働者の知能とか、才能とか、熟練度とか、いろいろな尺度がある。いずれにしても、その尺度の違いによって、製品の質や量の価値が決まるのです。だから、八時間働いた人にも、一時間働いた人にも、同じ報酬を与えたら、大変な不正義が行われたことになる。人々は真面目に働かなくなってしまうでしょう。

しかし、イエスはこの世の正義と正反対の話をしました。それは、天国もしくは愛の共同体の話です。そこでは、強者と弱者が共に支えあって生きる。強者は仕事によって弱者を支え、弱者は感謝と愛によって強者を支える。人は、いくら力があっても、他者の感謝がなければ、仕事をする気になれないのです。

福祉国家という理念、すなわち、年金、老人介護、国民皆保険、障害者雇用などを重視する国家構造は、自由競争社会の中に、イエスのこの「葡萄園の労働者」的思想を多少なりとも導入しようとする努力なのです。それによって、実は、本当に活力のある社会が生まれる、ということ人類は理解し始めている。人類という大きな共同体は、それを構成する各人がそれぞれ異なった仕事をしながら、全体として調和的に活動するとき、繁栄する。上に立って全体を統括する人、下にいて人々を支える基礎労働をする人、芸術活動で人々の心を潤す人、病弱や老齢によって無力でありながら感謝と知恵によって強力な人々に喜びを贈る人、このような人々の協調する社会が、すべての人が一

デナリオの社会である。

第三点。さて、それでは、人間は、自分で人生の目標を立て、自力で食べられるようになり、強者と弱者の協調する社会を作れば、それで、幸福になれるのか。人生の目的を達したのか。この段階にまで来れば、相当に幸福に近づいている、とは言えます。しかし、最後の一点が足りません。その一点とは他者との交わりです。

人はなんのために生きているのか。自然を味わい、人と交わるためです。自然を味わうということのうちには、詩を作ることも、歌を歌うことも、絵を描くことも、科学の研究に打ち込むことも、全部入っています。しかし、人間の最大の喜びは、人との交わりにあるのです。夫婦親子兄弟姉妹の交わり、友人との交わり、会社の同僚との交わり、近所の隣人との交わり。そこで、人は究極の生き甲斐を感じるので。

生き甲斐とは、自分が他人に必要とされている、役に立っている、助けになっている、喜びになっている、ということを実感することです。それは、他者のために働くことによって、他者によって自分の存在が肯定されるということなのです。

では、どうしたら、人と交われるか。なにもしないで、ぼんやり待っているのは駄目です。自分から、積極的に、他人の役に立つように奉仕することが重要です。それは、「こんにちは」という挨拶から始まる。

これは、自分の善意を相手に贈っていることです。知っている人にも、知らない人にも、誰にでも、「こんにちは」と挨拶する。それが、すべての「始まり」です。

その時、向こうから「こんにちは」という挨拶が返ってくれば、これはすごい喜びです。それだけで、一日中嬉しくなる。

このとき、返事をしてくれる人も、してくれない人も、いるでしょう。しかし、返事がないからといって、挨拶を止めたのでは、何も始まらない。挨拶してもらえなくても、こちらは挨拶しつづける。一方的に善意を贈りつづける。

では、なぜ、一方的なのか。なぜなら、人間は自由な絶対的存在だからです。人が自由であるとは、人は自分の在り方を自分で決定する存在者だ、ということです。それが人間の尊厳の意味です。また、絶対的とは、唯一無二ということです。それが、人間の「かけがえのなさ」です。それゆえ、人は決して他人の道具にはならない。他人の思い通りにはならない。それにも拘わらず、暴力によって他人を道具にすること、他人を奴隷化することが、人間の犯す最大の罪悪に他なりません。人類は、長い間、ついこの間まで、階級社会とか、人種差別とか、奴隷制とか、植民地支配などで、この罪悪を犯し続けてきました。

だから、人と交わるのは大変なことです。自分の善意に相手が応えてくれるかどうかは、相手の自由にかかっているからです。相手の自由の深い淵から湧き出る応答を期待して、われわれは、毎日、一所懸命、「こんにちは」と呼びかけ続けるのです。それに応えが返ってきたら奇蹟です。なぜなら、自分の力では「どうすることもできないもの」が、贈られてきたからです。それが奇蹟的な出来事である、という意味は、自由な呼びかけに対して自由な応答が返ってくることは、原因結果の因果的法則によって起こる出来事ではないからです。物質の世界では、すべての出来事が因果的法則に従って起こってくる。Aが起こればBが起これり、Bが起こればCが起これり、Cが起こればDが起これる。たとえば、地殻がずれれば、地震が起これり、地震が起これば津波が起これり、津波が起これば海岸地帯が水没する。すべては、必然的に起こるので

す。しかし、人間の世界では、このように出来事は必然的に起こるのではありません。ここでは、すべてが自由と自由との間の呼びかけと応答なのです。

（ここで、一言、付け加えておきたいことがあります。それは、私に命を贈ってくれた「あの目に見えない大きなもの」は、私の最大の他者でありながら、私の命の根底に入っている、という意味で、実は、私の本当の自己でもある、ということです。だから、私が、かりに世の中のすべての人に見捨てられたとしても、この奥底の自己が私を支えてくれている、と安心してよい、ということです。人間には、そういう根本的な安心があるはずで、この安心を東洋人は「梵我一如」（仏教）とか「至人に己なし」（老荘）とか、あるいは、「絶対他力」（浄土教）と言ったのです。）

さて、この世の話にもどりましょう。それだから、人間の最大の不幸は孤独です。友達がいないことです。

では、どうやって、孤独を抜け出すか。

他人に挨拶することによって。他人に善意を捧げることによって。他人に奉仕することによって。他人を愛することによって。

そういう努力を積み重ねてゆくと、いつか相手から応答が返ってくるでしょう。そのとき、人と人との交わりという、この世でもっとも美しい花が咲き出すでしょう。しかし、この花を咲かすには、努力が必要です。何もしないで、花は咲かない。その努力とは、他者になにも代償を求めずに、善いことをしつづけることなのです。

## 講師略歴

### 金 永秀 (きむ・よんす)

1957年、神戸で在日コリアン二世としてクリスチャンホームに生まれる。神戸改革派神学校、総神大学院（韓国）を経て、米国サンフランシスコ神学大学院修了。神学博士。在日大韓キリスト教総会・京都南部教会副牧師、在日大韓キリスト教総会・豊橋教会担任牧師、特別養護老人ホーム・永生苑豊橋施設長、米国ユナイテッドメソジスト教会・オークランド韓国人教会協力牧師、アルザスゲート日系人教会日本語部牧師を歴任し、現在、沖縄キリスト教大学院大学教授、宗教部長。主な業績は『三・一独立運動における宣教師評価－韓国教会史観の相克からの考察』（2002 沖縄キリスト教短期大学紀要 第31号）、『韓国「民衆神学」の社会的、神学的位置について』（2007 沖縄キリスト教大学院大学紀要 第3号）、『沖縄で読むマルコ福音書5：1－20』（2009 日本キリスト教教育学会『キリスト教教育論集』）など。



### 岩田靖夫 (いわた・やすお)

1932年4月25日生まれ。東京出身。東京大学卒業後、北海道大学助教授などをへて、1976年東北大学教授。のち聖心女子大、仙台白百合女子大教授を歴任。アリストテレス、プラトンなどの哲学を文献学的に研究、ギリシャ倫理想の現代的意



義をあきらかにした。またアメリカの倫理学者ロールズなども研究。2003年文化功労者。現在、東北大学・仙台白百合女子大学名誉教授。著作に「アリストテレスの倫理思想」「神の痕跡」「倫理の復権」「ソクラテス」など。

# 出 会 い

— キリスト教講演会・講和集 (22) —

2012年2月発行

発行人 松 平 功  
編集人

発 行 桃山学院大学チャペル（聖救主礼拝堂）  
〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1番1号  
TEL 0725-54-3131 FAX 0725-54-3210

印 刷 和泉出版印刷株式会社  
〒594-0083 大阪府和泉市池上町四丁目2番21号  
TEL 0725-45-2360 (代)



## 「桃山学院の学院章」

この学院章は、イエス・キリストの最初の弟子である聖アンデレ (St. Andrew) にちなんでデザインされている。「アンデレ・クロス」(X字型の十字架) は、イエスの教えを守り通して殉教したアンデレの偉大なる生涯のシンボルである。「<sup>セ</sup><sup>ク</sup><sup>イ</sup><sup>ミ</sup><sup>ニ</sup><sup>メ</sup>」(「我に従え」というラテン語) は、アンデレがイエスに出会った時に呼びかけられた言葉である。したがって学院章はアンデレのように最後まで「自由と愛」のキリスト教精神によって生きることを示している。

*St. Andrew's University*